

指導者（保護者）として大切にしたいこと（その12）

～ 今は根を下に伸ばせ ～

2020年4月吉日

広島県バスケットボール協会U12部会

広島地区指導者 大庭浩資

広島県バスケットボール協会U12部会広島地区の保護者の皆様、指導者の皆様、役員の皆様、いつもお世話になっております。

3月からの臨時休業、そして学年始休業日を経て、4月7日、広島市内小学校の新年度が本格的に始まりました。

私の勤務する学校でも、久しぶりの友達や先生との再会に、児童の笑顔や喜びの声。やはり学校という所は児童の元気な声が似合います。でもその日は、外遊びは自粛。楽しみは明日に持ち越されました。

4月8日、新学期2日目の登校です。今日こそは運動場で遊べるかな。残念ながら朝遊びは自粛。さらにこの日は入学式のためすぐに下校。またまた明日に持ち越し。

4月9日、登校3日目。今日は朝から、運動場にたくさんの子どもの姿。また大休憩も運動場は子どもで一杯。男女仲良くドッジボールをしたり鬼ごっこをしたりする姿は、ごく当たり前の風景です。児童全員がマスクを着用していることを除けば。

また給食も始まりみんな満面の笑み。大きな声で「合掌、いただきます！」これもごく普通の風景です。おしゃべりをせずに黙々と食べていることを除けば。

4月10日、登校4日目。今日は、朝休憩・大休憩・昼休憩ともに、運動場は子どもで一杯。これも普段なら、ごく当たり前の様子です。

また6年生は、1年生のお世話や委員会活動の仕事を張り切って行っています。その姿は最高学年になった自覚と自信に満ちており、見ていてとても気持ちのよいものです。

しかし残念ながら、わずか6日の登校後に再度の臨時休業が始まり、この当たり前の風景が当たり前でなくなりました。

広島地区においても、新型コロナウイルス感染拡大の影響は想像以上に深刻です。この状況で、保護者や指導者にできることはごく限られています。今はとにかく「子ども達の命は大人が守る」ことを心に留め置きましょう。そしてチームのみんなと一緒に練習できる日が早く来ることを願いながら、この深刻な局面を乗り越えていきましょう。

さて、そんな中で以下のコラムが目にとまりました。

読んでみて、改めてスポーツの持つ魅力、スポーツの持つ力を感じました。と同時に、今は練習のできないミニバスケットボールを愛する児童の皆さんが、今後練習を再開した時、その元気あふれるプレイで、私たち大人に希望と勇気を与えてくれるものと信じています。それまでは「がんばって！！ 自主練習」。

「今は根を下に伸ばし・・・終息時こそスポーツの出番」

“待望の春”になるはずだった。ロッテの佐々木朗希のプロ野球デビューにMLBエンゼルス大谷翔平の二刀流復活。53歳になったカズのJ1復帰・・・待ちわびていた夢舞台はすべてお預け。なんだかスポーツ欠乏症になりそうだ。

新型コロナウイルスが恨めしい。

スポーツが豊かな生活を送るための、欠かせない栄養素になっていたことにあらためて気付かされた。思えば、仕事に疲弊したあの日々、イチローのヒットにどんなに癒された事だろう。

東日本大震災が起きた2011年、なでしこジャパンのW杯優勝の快挙は、久しぶりに明るい光となって日本を照らし、列島を幸福な空気に包んだ。

人は暗い世相や苦しい時にこそ、スポーツや娯楽を求める性質がある。

終戦の1945年、日本中に焼け野原が広がり、人々は衣食住を確保して生きるのが精一杯だった。にもかかわらず、再開されたスポーツに大衆が殺到した。同年神宮球場で行われたプロ野球東西対抗戦には、1万人の大観衆が詰め掛けた。

東日本大震災の直後、スポーツイベントが次々に中止された。「有事にスポーツは役に立たないのか」。多くのスポーツ人は悩んだ。

しかし震災からほどなく、アスリートが被災地を慰問すると避難生活を余儀なくされた人々が殺到した。震災1か月後、カズが訪れた岩手・盛岡市の競技場は1万3千人であふれた。“スポーツの力”の大きさに驚かされた。

新型コロナウイルスにスポーツが奪われ、アスリートたちは無力を感じているかもしれない。試合ができない。練習する場所もない。堪え忍ぶしかないつらい時間。でも朝の来ない夜はないのだ。

箱根駅伝の優勝監督でもある山梨学院大学の上田誠仁氏のこんな言葉を思い出した。「何もできない寒い日は、下へ下へ根を伸ばせ」。今はしっかりと力を蓄える時期。

新型コロナウイルスが終息した時、人々の心と体は疲弊しきっているだろう。その時こそスポーツの出番なのだ。